

令和5年度 尚絅大学附属こども園 学校評価
(評価対象年度：令和5年度) 掲載

本園の教育目標

附属こども園の理念・使命・目的に基づき、就学までに次のような子どもを育成することを目標として教育・保育を行う

(1) 恵まれた自然環境の中で、いきいきと遊ぶ子ども

(2) すなおに自分を表現する子ども

(3) 人とのかかわりの中で思いやりや親しみをもつ子ども

(4) 心豊かで、創造性のある子ども

(5) 遊びを工夫し、進んで行動する子ども

令和5年度重点目標（事業計画）に対する学校（自己）評価

対象：教職員60名、回答数60名、回答率100%

評価はABCの3段階とします。以下の2～6頁のⅠ～Ⅴの「評価」で、A評価が2/3以上ある場合がA評価を、2/3以上AまたはB評価がある場合を「B」ランク、それ以外を「C」ランクとします。

	評価の観点	評価	成果及び課題
1	子どもの健やかな成長のための教育・保育の充実	B	①園の環境を活用し園児の発達や興味、季節等を配慮して教育・保育を計画的かつ創造的に実践することができた。特に、本園の自然環境を生かした教育保育活動と遊びの中に組み込まれている「食に関する活動」は、保護者から高い評価を得ることができた。 ②新たな試みとして、小学校へのハードルを低くし、見通しをもって入学できるように、武蔵ヶ丘小学校1年生と年長児の交流を年間3回実施した。 ③DX化の推進では、今年度ICT支援システム「コドモン」を導入し、園児の出欠管理やバス運行状況、お知らせなどの利用を通して、保護者とのコミュニケーションが以前より円滑になり、業務の省力化にもつながってきている。 ■「コドモン」の利用については、研修を通して、便利で豊富な機能を業務省力化や保育の質向上にさらに役立てることができるようになっていく必要がある。 ■今後、園児の安全確保、職員の負担軽減のために、安定した職員の確保ができるよう努めていきたい。
2	子育て支援の充実	A	①在園児保護者への支援は、「子育て相談会」「お誕生会」「おしゃべり広場」「親と子のつどい」などが好評だった。 ②子育て支援ルーム「どんぐり」の活動では、制作や知育ヨガ、講話など様々な活動を準備し、参加者からはとても好評だった。 ■特別な支援を要する園児と援助・配慮を必要とする保護者に対して、今後とも療育施設との連携や近隣市町担当課等との連携を推進する。 ■園児の安全を最優先に考え、研修や講話、会議などを通して事故防止の徹底を図っていく。 ■「おしゃべり広場」の参加者が以前より少なくなっており、日程の調整や魅力ある内容の充実に努めたい。
3	次世代保育者の育成	B	①実習連絡会などを通して実習生の情報共有や「実習のしおり」を通して実習の指導内容の共通理解に努め、実習生にとって充実した教育実習につながったと考える。 ②コロナ禍でできなかった「運動能力測定」を大学と連携して数年ぶりに行ったり、幼児教育学科の授業の一環として絵本の読み聞かせやストレッチ体操などの活動を行ったりして、学生の教育・保育力向上に寄与することができた。 ③高校生、幼児教育学科、大学生の教育実習、自主自習だけでなく、中学生の保育体験なども積極的に受け入れ、附属園としての役割を果たすことができたと考える。 ■ここ数年のコロナ禍の影響で大学・短大の先生との連携が十分できなかったため、今後園内研修や園外研修、園内の教育保育活動を通して積極的に連携を深めていきたい。 ■教職員が平日の研修に参加する際のフォローづくり、また振替休日をとりやすくするためのフォローの保育者の確保が課題である。
4	自然豊かな園庭で伸び伸びと遊ぶ園児の確保	A	①令和6年度の入園希望者の状況では前年度の希望者数を下回り、収支の均衡は十分できなかった。令和5年度スタート時は、278名だったが、途中入園者が例年より多く、最終的には定員の290名に達した。令和6年度のスタート時も令和5年度と同程度の見込みであるが、途中入園の希望者が多く、今年度並みまでに達するのではないかと予想している。 ②入園願書希望者の減少を受け、1号保護者に「園児募集に関するアンケート」をとり、その結果をもとに職員全員で方策を協議し、次年度以降の方策を立て取り組んだ。 ③尚絅学園HP「お知らせ欄」で、本園の魅力や園児達の姿の情報提供を積極的に行った。 ■次年度の入園願書受付が例年より1か月早くなったので、ポスターの広域配布やホームページの利用を通して早めに園児募集の情報を示していく。 ■「園児募集に関するアンケート」の結果を生かし、未就学の保護者に対して魅力ある園運営を進め、積極的に園の魅力をアピールしていきたい。

1 学校（自己）評価

令和 5 年度

尚絅大学附属こども園

学校評価

令和 5 年度重点目標（事業計画）に対する学校（自己）評価 対象：教職員60名、回答数60名、回答率100％

評価は、教職員が「評価の観点」毎に、A：十分達成、B：概ね達成、C：やや不十分、D：不十分の4段階で評価し、割合(%)を算出した。
それを、評価(A)と評価(B)を足した割合を算出し、85%以上がA、85%未満70%以上がB、70%未満50%以上がC、50%未満がDと評価した。

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
1 尚絅らしさを生かした、質の高い教育・保育の充実と、自然豊かな園庭で伸び伸びと遊ぶ園児の育成	1 子どもの健やかな成長のための教育・保育の充実	(1)クリエイティブな教育・保育の実践と改善（幼児棟）	「全体的な計画」「2週計画」「各クラスの計画」等をもとに、豊かな自然体験や食育等で心身ともに健やかな園児達を育てる教育・保育（幼児棟）	A	①日頃の環境整備・補修に努め、園の環境を活用し園児の発達や興味、季節等を配慮して教育・保育を計画的かつ創造的に実践することができた。 ②園で採れた野菜や果物を給食で使ったり、試食体験をしたり、家に持ち帰り家庭で食べたりなど園の自然と食を結び付ける活動を積極的に行った。 ■今後とも、教職員のライフステージに応じた資質の向上のための園内研修・園外研修の充実を図る。
		(2)要領に示された「10の姿」の方向に育つ園児達	質の高い教育・保育や安心安全な環境で伸び伸びと遊ぶ園児達の姿に対して、学校評価保護者アンケートにおいて、関連する設問の「満足」の比率が90%以上を達成	A	①10の姿全てにおいて90%を超えており、質の高い教育・保育や安心安全な環境で伸び伸びと遊ぶ園児達の姿に近付けたと考える。 ②小学校へのハードルを低くし、見通しをもって入学できるように武蔵ヶ丘小学校1年生と年長児の交流を年間3回実施した。 ■相対的に低い項目について、園外・園内研修を通して、課題を共有し、対応力を高めたり園としての対策をとったりしていく。
		(3)教育・保育におけるDX化の推進	DX化により、スクールバス内園児置き去り事故及び出欠管理ミス0を教職員の自覚と協力で継続。ICTシステムによる業務の効率化、保護者とのコミュニケーションツールとしての活用	B	①スクールバスの安全装置の設置が6月に終わり、ICT支援システム「コドモン」における「出欠遅刻連絡」や「お知らせ」の活用ができるようになり、リアルタイムでバスの位置も把握でき、バスの運行に関しては順調に進んでいる。 ②「コドモン」の導入により保護者との出欠や園からのお知らせなどの連絡の効率化が進んだ。 ■「コドモン」での分かりやすい連絡の伝え方や機能拡大については今後の課題である。
		(4)園児の安全性を高める体制づくりと、教職員の業務効率化・負担軽減の実現	年休や出張等で教職員が不在の場合、園児の安全性の低下を防ぐためのフォロー体制づくり、保育者・補充教職員・パート保育者等の確保と、幼児棟教職員の時間外勤務時間数月平均10時間以内の実現	B	①園児の安全性の確保を第一に考え、幼児棟と保育棟で連携を取りながら、できる限り見通しをもって臨機応変にフォロー体制をつくっている。 ■幼児棟教職員の時間外勤務時間数は月平均10.1時間となった。園務分掌の内容を見直したりDX化を推進を含め効率的な時間の使い方を検討したりしながら、削減していきたい。 ■欠員が出た2学期以降、募集しても応募がなく、4月当初の職員数を満たすことができず、職員の負担が増え、苦心した。
2 豊かな人的・物的環境を通した、尚絅らしい家庭的で温かい愛情に満ちた保育の充実	2 豊かな人的・物的環境を通した、尚絅らしい家庭的で温かい愛情に満ちた保育の充実	(1)一人一人に応じた温かい保育（保育棟）	一人一人に応じて「個人別月間指導計画」や「保育日誌」等を活用して行う保育	A	①細やかな個人別月間指導計画を立て、保護者と連携を図っている。「保育日誌」等を活用し、保育教諭間の連携がとれるようにし、細やかな保育や怪我や病気、安全面に関する対応を行っている。 ■今後とも一人ひとりが大切に育てられるために、保育をPDCAサイクルに則り修正発展させていく。
		(2)要領に示された「5つの領域・3つの発達」の方向に育つ園児達	家庭的で温かい愛情に満ちた安心安全な保育に対して、学校評価保護者アンケートにおいて、関連する設問の「満足」の比率が90%以上を達成	A	①「5つの領域・3つの発達」の方向に育っていると評価している割合は90%を超えており、温かい声かけや愛情あふれる接し方を教職員が意識して実践できていると考える。
		(3)園児の安全性を高めるための保育者の確保	年休や出張等で教職員が不在の場合や、早朝や午後保育時に教職員が不足する場合の園児の安全性を高めるためのフォロー体制づくり、保育者・補充教職員・パート保育者等の確保	B	①園児の安全性の確保を第一に考え、幼児棟と保育棟で連携を取りながら、できる限り見通しをもって臨機応変にフォロー体制をつくっている。 ■欠員が出た2学期以降、募集しても応募がなく、4月当初の職員数を満たすことができず、職員の負担が増え、苦心した。
		(4)教職員の共通理解と資質の向上	職員会議や園内研修を年間に10回以上開催	A	①月1回を目途として、着実に実施できている。12回実施できた。 ■今後は保育者の創造性や学びの成果を生かす取組が望まれる。またコドモンの機能拡大の研修も積極的に取り入れていく。

1 学校（自己）評価 令和 5 年度 尚絢大学附属こども園 学校評価

令和 5 年度重点目標（事業計画）に対する学校（自己）評価 対象：教職員60名、回答数60名、回答率100%

評価は、教職員が「評価の観点」毎に、A：十分達成、B：概ね達成、C：やや不十分、D：不十分の4段階で評価し、割合(%)を算出した。
それを、評価(A)と評価(B)を足した割合を算出し、85%以上がA、85%未満70%以上がB、70%未満50%以上がC、50%未満がDと評価した。

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
II 子育て支援の充実	1 保護者・行政・療育施設等と連携した在園児保護者の子育て支援の充実	(1)園児の命と安全を守るための、教職員の研修・保護者支援のための「子育て相談会」・関係機関等との連携・協力	子育てに不安や困り感をおもちの保護者、特別な支援を必要とする園児とその保護者、DVや児童虐待事案等に対して、教職員研修の実施・「子育て相談会」等の年間10回以上開催 行政機関・小学校・療育施設・児童相談所・警察等との連携・協力による支援	A	①「子育て相談会」は年間14回行う予定であったが、実際は16回を実施した。 ②「お誕生会」「おしゃべり広場」「親と子のつどい」などを通して在園児の子育て支援を図ることができた。 ③職員研修で、療育施設・菊陽町の方を講師にお願いし、実りの多い研修ができた。また菊阿地区の幼稚園連合会主催の特別支援教育に関する講演会ではこども教育学部の先生に講師をお願いし、多数参加し研鑽を深めた。 ■「おしゃべり広場」の参加者が以前より少なくなっており、日程の調整や魅力ある内容の充実に努めたい。
		(2)保護者の安心感と園児の安全性の向上	教職員の確保を通じて、直近5年間の日本スポーツ振興センターへの申請件数平均8件以内、園児数に占める割合3%以内を実現	A	①昨年度までの5年間の平均は13件であったが、今年度の申請件数は7件であった。 ■園庭や室内での事故の起きないような見守りの体制の共通理解や施設整備を進めていく。
	2 子育て支援室「どんぐりルーム」における地域子育て保護者支援の充実	(1)「どんぐりルーム」の積極的開催	「どんぐりルーム」開催年間140日以上（感染症拡大時は除く）	A	①たくさんの未就学児とその保護者が「どんぐりルーム」に来室した。開催日数は133日だった。 ■担当が兼務しており、兼務しているきらきら（2号保育）での保育対応や午前中保育時のきらきら対応のため目標に5%届かなかった。その中でできる限り実施したところであるが、次年度は午前中保育の日数を減らすなどしながら目標を目指す。
		(2)講演会やイベント等の計画的実施	講演会やリトミックなどを年間5回以上、お子さまの体重測定を年間10回以上、制作・お誕生会・運動会・クリスマス等のイベントを年間20回以上実施し、参加された保護者満足度が80%以上	A	①講話(トイレトレーニング・おもちゃ作り)が3回、月1回の身体測定・制作・年3回の知育ヨガの実施を行い参加者の満足度も高かった。 ■今後も参加者のニーズに合ったイベントを企画していく。

1 学校（自己）評価

令和 5 年度

尚絅大学附属こども園

学校評価

令和 5 年度重点目標（事業計画）に対する学校（自己）評価

対象：教職員60名、回答数60名、回答率100％

評価は、教職員が「評価の観点」毎に、A：十分達成、B：概ね達成、C：やや不十分、D：不十分の4段階で評価し、割合(%)を算出した。
それを、評価(A)と評価(B)を足した割合を算出し、85%以上がA、85%未満70%以上がB、70%未満50%以上がC、50%未満がDと評価した。

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
Ⅲ 次世代保育者の育成	1 尚絅高校生、幼児教育学科、学部学生のための教育実習の充実	(1)高校生、短大生、大学生の教育実習内容の改善	「実習のしおり」を改訂しつつ教育実習の充実に努め、実習生の「評価」の平均が3.5以上を達成	A	①短大とこども園で話し合いを重ねながら「実習のしおり」は短大で改訂されており、実習の充実につなげている。実習生の実習に望む態度も良好だった。 ②「運動能力測定」を大学と連携して行ったり、幼児教育学科の授業の一環として絵本の読み聞かせやストレッチ体操などの活動を行ったりして、学生の教育・保育力向上に寄与することができた。 ■2年生の評価の平均は3.1となった。1年生の評価の平均は3.0であった。
		(2)実習生を直接担当する保育者10名の業務負担軽減	実習生を直接担当する幼児棟担任10名の業務負担軽減を工夫し、実習期間6か月（5～7、10～12）の時間外勤務時間数の月平均15時間以内	A	①幼児等担任における実習期間6か月の時間外勤務時間数の月平均は15時間以内の目標内の10.1時間という結果だった。昨年度と比較しても、約5時間少なくなっている。 ■さらに削減できるように、業務の見直しを図っていく。
	2 大学・短期大学部と連携した研修の充実、研究の推進	(1)大学・短大と連携した研修の充実	大学・短大と連携した園内研修や、授業、講話等を年間10回以上実施	B	①実習連絡会などを含め、また公開シンポジウム・短大セミナーへの積極的に参加し、10回実施した。 ■ここ数年のコロナ禍の影響で大学・短大の先生との連携が十分できなかったため、今後園内研修や園外研修、園内の教育保育活動を通して積極的に連携を深めていきたい。
		(2)園外研修に主体的・積極的に参加できる環境づくり	園外研修中に園児の安全を守るため及び振替休日取得のためのフォロー体制づくり、補充保育者等の確保	B	①安心して園外研修に出かけられるように事前に打ち合わせをして保育・教育内容を引き継いでいる。また計画的にフォロー体制づくりを行った。 ■教職員が平日の研修に参加するためのフォローの保育者の確保、また振替休日を取りやすくするためのフォローの保育者の確保が課題である。

1 学校（自己）評価

令和 5 年度 尚絅大学附属こども園 学校評価

令和 5 年度重点目標（事業計画）に対する学校（自己）評価 対象：教職員60名、回答数60名、回答率100%

評価は、教職員が「評価の観点」毎に、A:十分達成、B:概ね達成、C:やや不十分、D:不十分の4段階で評価し、割合(%)を算出した。
それを、評価(A)と評価(B)を足した割合を算出し、85%以上がA、85%未満70%以上がB、70%未満50%以上がC、50%未満がDと評価した。

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
IV自然豊かな園庭で伸び伸びと遊ぶ園児の確保	1 遊び環境を整備し、本園の魅力や園児達の姿の情報提供	(1)園児の遊び環境の整備	園児の年齢や興味・関心、季節等に合わせた魅力的な遊び環境の整備	A	①2週間ごとの環境会議を開き、学年間、学年内の情報交換をしながら計画を立て魅力的な遊びの環境を整えている。 ■幼児棟、保育棟合同での会議が実施できるような日程の確保に努める。
		(2)尚絅学園HP「お知らせ欄」の充実	尚絅学園HP「お知らせ欄」で、本園の魅力や園児達の姿の情報提供を年間に100回以上	A	①HP「お知らせ欄」の情報提供回数は、187回提供した。 ■今後は当日の様子をその日のうちに掲載する日数を増やしたり、お知らせ欄以外の内容を充実したりしながら、魅力あるHPにしていきたい。
	2 保護者のニーズに応じた園児を確保と収支均衡	(1)受入園児数や定員の見直し等による収支均衡の実現	年齢別・認定別の受入園児数の構成を見直し将来的には定員を見直す等の工夫により収支均衡を実現	A	①令和6年度の入園希望者の状況では前年度の希望者数を下回り、収支の均衡は十分できなかった。令和5年度スタート時は、278名だったが、途中入園者が例年より多く、最終的には定員の290名に達した。 ②1号保護者に園児募集のアンケートを取り、それをもとに職員で協議し園の運営改善を進めてきた。 ■次年度の入園願書受付が例年より1か月早くなり、それに向けて魅力ある情報の提供に努めていく。
		(2)教職員の心身の健康や安全面への配慮	教職員の勤務時間・休暇、服務等の管理、心身の健康や安全面への配慮、ハラスメントの防止、法令順守、危機管理	A	①勤務時間の順守、休暇についての取得について、先を見通した動きができるように定期的に声かけしているところである。心身の健康や安全面の配慮については管理職が保育者と1～3回面談を行ったりアンケートを行ったりしている。 ■今後も職員の状況を多面的に捉えながら心身の健康や安全面に配慮をしていきたい。

学校関係者評価に対する総括

	評価の観点 (文科省が教育・保育 要領で示したねらい)	評価	成果と課題
I	0歳児 「3つの発達」	A	1 0歳ひよこ組の保護者のみなさまは、わが子の姿を見て「3つの発達(身体的・社会的・精神的)」が、おおむね順調に発達していると思われるています。 2 社会的な発達については、「ゆるやかな担任制保育」を展開し、親の次に親しみをもつ保育者との気持ちがより通じ合うように工夫していることが功を奏していると自己評価しています。 3 精神的発達においては、豊富な遊具や保育者自作遊具等に恵まれて順調な発達をしていると評価しています。
II	1・2歳児 「5つの領域」	A	1 1歳りす組・2歳うさぎ組の保護者のみなさまは、わが子の姿を見て「5つの領域(健康、人間関係、環境、言葉、表現)」が、おおむね順調に発達していると思われるています。 2 保護者は、広い園庭や恵まれた施設、森や芝生広場等において健やかに伸び伸びと育つ環境を用意できていることを望ましい環境と評価しておられます。 3 領域別の中では特に「言葉」「表現」の成長を評価しています。保育者達は、愛情をもって応答的・受容的な保育を実践しています。
III	3・4・5歳児 「10の姿」	A	1 満3歳ぱんだ組～年長組の保護者のみなさまは、わが子の姿を見て、認定こども園の教育・保育修了時の具体的な姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿10」に照らして、全項目とも95%を超えるみなさまが発達の段階に沿った順調な育ちをしていると思われるています。 2 内容別にみると、満3歳～年長組まで共通して「自然とのかかわり・生命尊重」で99.5%、「健康な心と体」や「協同性」も99.0%と高く、コロナ禍が収束に向かい、園庭や近隣の森などでの遊びを通して健全に育っていることを実感して下さったことを感じます。 3 教職員は、「自立心」「健康な心と体」「協同性」「豊かな感性と表現」が高く95%を超え、その他の姿でも90%を超えていました。比較的低いものが「言葉による伝え合い」や「道徳性・規範意識の芽生え」でした。 4 保護者より教職員の方が全体的に低い評価です。これは、保育者の方が集団の中の現れる園児の姿を見ていることと、さらに良くなって欲しいという願いや自らの教育・保育を振り返り謙虚により良い姿を高い目標として据えているという使命感も含まれていると考えています。 5 子育て支援事業や園の経営、教育・保育に対してはおおまかにご満足いただいています。

評価は、保護者が「評価の観点」毎に、4:とても育っている、3:だいたい育っている、2:あまり育っていない、1:まったく育っていないの4段階で評価し、割合(%)を算出した。それを、評価4と評価3を足した割合を算出し、80%以上がA、80%未満70%以上がB、70%未満50%以上がCと評価した。

- 1 評価委員会開催日時 令和6年3月
- 2 調査対象 学校評価委員6名（祖父母代表、杉の子会（PTA）会長、学園関係者4名）回答数100%（※地域代表の方は辞退）
- 3 評価基準
- 評価の観点Ⅰ～Ⅴ： 4達成していると思う 3だいたい達成していると思う 2あまり達成していないと思う 1達成していないと思う
- 評価の観点1～6： 4充実していると思う 3だいたい充実していると思う 2あまり充実していないと思う 1充実していないと思う

評価の観点（Ⅰ～Ⅴは事業計画の項目、1～6は経営・管理面）	4	3	2	1
Ⅰ 教育・保育内容の改善と尚絅らしさの追求～豊かな自然環境を生かした特色ある園づくり～	83.3	16.7	0	0
Ⅱ 園児の確保～園児募集に関する方法や広報活動等の改善～	66.7	33.3	0	0
Ⅲ 子育て支援の充実～在園児保護者・地域保護者～	66.6	16.7	16.7	0
Ⅳ 教育・保育の指導力向上～園内研修の充実、園外研究会等への積極的参加、短期大学部との連携～	100.0	0	0	0
1 経営・管理面（安全面、園児確保、教員の確保、広報、コンプライアンス等）	50.0	50.0	0	0
2 労働面（やりがい、人間関係、広報、コンプライアンス等）	20.0	60.0	20.0	0
3 教員としてのライフステージに応じた指導力の向上	20.0	80.0	0	0
4 特別支援教育、人権教育、安全教育、食育等	50.0	50.0	0	0
5 大学・短大との連携、教育実習の充実	33.3	66.7	0	0
6 保護者(杉の子会)、地域、行政、療育施設、近隣小中学校等との連携	66.7	33.3	0	0

評価委員の意見・質問及びこども園からの回答					
○広い園庭や恵まれた環境の中で、子どもたちが身も心も開放され、思いっきり体を動かして遊べること、野菜や果物を収穫し、園で食べたり家庭で食べる嬉しさは尚絅こども園でしか味わえないと感じています。→尚絅こども園が大切にしていることを励ましていただき、有難く思います。	○園児の心身の発達を助長し生涯にわたる人格形成の基礎を培うという保育教育の理念を着実に達成しておられると思います。園児の安全安心を保育・教育を実現するためのICT支援システム「コドモン」の利活用などDX化の取り組みの好例として、大学・短大も参考にさせていただきたい。次世代保育者の育成については、勤務条件、労働環境の厳しい状況にあって、非常に困難な課題とは思いますが、何らかの形でご協力したいと思います。→「コドモン」の活用については業務改善や保護者の方の利便性を高めていけるように研究してまいります。	○幼児教育学科としても、今後ご協力できる限り、精一杯連携をとっていきたいと考えています。今後も、附属こども園実習はじめお世話になります。どうぞよろしくお願い申し上げます。→附属としての使命感を持ちながら、次世代保育者の育成に寄与できるよう努めてまいります。	○教員の確保については、厳しい状況ですが、幼教、こども教育学部の卒業生が就職したいと感じる園にしてみたいと思います。→採用されてすぐに教育実習を担当することもあり、学生の皆さんにはハードルが高く感じられるかもしれません。実習生とともに成長していこうという意識をもってもらえるように新規採用の先生を今後も職場全体で応援していきます。	○こども教育学部はまだ1年目ですが、3年後は20名の学生が卒業する予定です。それは実習園であるこども園があることで子どもたちの関わりの機会がたくさんあること、また学生達（1年生）も1年間とはいえ目覚ましい成長が感じられます。まさに幼い子供たちが学生を育てるといっても過言でないと思います。実習以外にもインターンシップ制度も検討してまいります。実習とは違い、より職場での仕事体験もインターンシップ制の中で育つのではないかと思います。教員・学生とも協力できることは喜んでお受けしたいと思います。→園児にとっても実習生との関わりがより良い成長につながっています。実習以外でも関わりも大変ありがたく思っています。	○次世代保育者の教育育成に心配はあまりしていません。確保の問題だとその他には、現職の方々の過負荷を丁寧に見つめ、一つ一つ改善へ進めることが重要かと考えます。外部識者、認定されたサポータ(NPO等)の協力体制が出来ることから進められたら是非検討ください。→ご指摘のように協力体制をとりながら一つ一つ改善できるように努めてまいります。

学校評価の総括

I	保護者も保育者も、わが子・園児は大まかに目指す方向に育っていると評価しています。
II	保護者も保育者も、園経営はほぼ充実していると評価しています。
III	保育者は使命感をもって教育・保育に当たっており、教師力を高める研修を望んでいます。
IV	今後の課題として、以下のことが必要であると考えています。
1	自然豊かな環境を生かした教育・保育が尚絅らしさの原点です。「全体的な計画(教育課程)」をもとに、保育者全員が温かく愛情に満ちた教育・保育を通して健やかな園児の育成に努め、在園児保護者・地域子育て保護者から信頼される園にしていくことが重要だと考えます。
2	今でも自然豊かな環境で愛情豊かな教育・保育に取り組んでいることに多くの評価をいただいています。そのうえで、1号園児の希望者が減少する時代の中で、保護者が入園させたいと思える魅力ある園の運営を進めていく必要があります。「園児募集のアンケート」をもとに協議した内容を実行に移し、園運営の改善を図っていきます。具体的には、お弁当の日や午前中保育の日の削減、一時預かり保育の手続きの簡略化・合理化、スクールバスの運行、どんぐりルームの運営や広報、行事の見直し、杉の子会との連携など多岐にわたる分野で、魅力ある園をめざして取り組んでいきます。その取り組みを行ったうえで、必要に応じて定員数の見直しを検討していきたいと考えます。
3	DX化の推進では、今年度に業務支援システム「コドモン」を導入し、スクールバス運行や保護者との出欠確認やお便りのペーパーレス化などで利便性を高めました。今後は、教職員が業務改善のためにさらに活用できるように、研修や実践を通して「コドモン」に関する知識技能を高めていきます。
4	在園児保護者と地域子育て保護者の支援に努めます。在園児保護者に対しては、児童虐待やDV事案等の対応に関係機関とも連携して取り組み、園児の命と成長を守ります。また、特別な支援を必要とする園児の保護者支援としては、療育施設や菊陽町との連携、子育て相談会等に努めます。さらに、教職員の研修を重ねるとともに、地域子育て保護者に対しては、「どんぐりルーム」のさらなる充実を図りながら支援に努めます。
5	本園の使命である教育実習では、これまで特に幼児教育学科の学生に対する教育実習を中心に行ってきました。次年度は尚絅大学こども教育学部の学生の教育実習も受け入れます。幼児教育学科、こども教育学部の教職員の方々と緊密に連携しながら、学生にとって実り多い実習となるように努めます。
6	教職員のライフステージに応じた資質の向上のための園内研修・園外研修(大学・短大と連携した研修、キャリアアップ研修、幼児教育諸団体等の研修)を計画的、積極的に実施していきます。
7	欠員後募集しても、応募がない状況がありました。保育者の確保、働き方改革を含めた処遇改善をさらに推進する必要があると考えます。
8	施設設備等の安全性の向上に努めます。 幼児棟は、2005年に建築してから19年目のメンテナンスが必要です。屋根や室内の壁の補修等を行なっていきます。